

村上二郎著作集

第六卷

村上
二郎
著作集
第六卷

本 隆 明
子 兜 太
谷 秀 昭

国
文
社

村上一郎著作集 第六卷
作家・思想家論Ⅱ

1979年11月1日初版第1刷発行
定価5800円

著作権者 村上栄美
発行者 前島 倣
発行所 国文社

東京都豊島区南池袋 1-17-3

電話 東京 987-2865

振替 東京 8-195058

印刷 野村印刷

製本 凸版印刷株式会社

村上一郎著作集 第六卷 目次

北 一輝論

北 一輝論

明治から昭和へ

——支配と被支配の構造——

私抄 “二・二六事件”

——「革正」か「革命」か?——

萩原朔太郎ノート

——抒情と憤怒

抒情と憤怒

利根川 140

倫理的正義感 151

容貌論 157

『氷島』の前景から 165

故郷 179

敵をもつ詩 189

敵をもつ詩（承前） 201

暮鳥の影（附、土田杏村のこと） 207

詩作のバネ 223

文語詩への葬送 233

*

140

139

112

89

10

9

朔太郎における刀水

萩原朔太郎の病理と文体

苛烈なる抒情者

センチメントを巡る謎

——伊藤信吉、佐藤房議編『萩原朔太郎全書簡集』書評

腰を落して構える人

——清岡卓行『萩原朔太郎「猫町」私論』書評

竹内好私抄

——人間の勁さとめでたさとの交錯について

この年輪を見よ

——吉本隆明『初期ノート』に寄す

和米混こう文体

——小島信夫『抱擁家族』

三島由紀夫小論

一 浪曼者への挽歌

二 歎歎と慟哭の精神過程

三 三島美学を超越せよ

『神神』の聲音

——石川淳『現代日本文学大系』七十六巻へ

このあふるるもの

——瀬戸内晴美『祇音女御』『蘭を焼く』

文人の志気のゆくへ

——小高根二郎著『蓮田善明とその死』

三島由紀夫の政治と行動

貴重な文学者の文体

——橋川文三著『政治と文学の辺境』

自責の暗部

——吉本隆明『初期ノート増補版』をめぐって

この日の涯に

末期の瞳

——三島由紀夫の屍に寄す

或るひきうた

——わが好敵手・三島氏の屍に

時代と時代を超えるもの

北一輝における “右舷” と “左舷”

わたしの「二・二六体験」

北の「左」舷を追う者

北の「右」舷を追う者

新資料・その他

歌人としての保田與重郎

超越的浪漫者・高山樗牛

——明治国民主義の趨勢の裡で

ヒトラー小見

文化『防衛論』をめぐる

武断と官能

——三島由紀夫著『日本文学小史』

日本浪漫派覚え書

或る「踏絵」考

天皇論

「出来合い」のナシヨナリズムを排す

内村鑑三と岡倉天心

——明治の「事業」者

防人Ⅱ小野田陸軍少尉

溘然たる死・橘孝三郎

370

372

378

381

388

393

400

402

412

416

445

450

464

469

草叢の民の肉声を探る

——松本健一『風土からの黙示』

石原莞爾・断章

解説 磯田光一

解題 樋口 寛

村上 一郎著作集 第六卷 作家・思想家論Ⅱ

北 一輝論

北 一輝論

I

北一輝が、自體文學的な仕事とはきわめてかけはなれたところに立っていたにもかかわらず、今日彼をかえりみ、かつ彼について水準的な勞作をなす者が、多く文學者ないしすぐれて文學者的な氣質をそなえた思想者に限られているように見うけられることは、偶然でないと思う。

北の生涯と仕事とは、何か人間におけるどす黒いものが流れており、それが異様な抵抗感をもって人に迫る衝擊をもたらす事実なしには、人の文學的な氣質に訴えかけることはあるまいと思われる。單に北の呪術によるものであろうか。北のアラベスクな文體は漢學の教養にもとづく他のどんな文體にも欠けた攪拌力を保有し、それは、思想における何らかの苛烈、殘虐な趣きといつてもよい。外に向つては人をねじふせるとともに、内に向つては己れをむりにもねじふせて、自他の欺瞞を排し、そこにはじめて辛うじて成るような思考と表現の仕方が、この衝迫を生むのではないかと考えられる。終始、北は危機意識をみなぎらせた思考をつづけた。

危機意識ということばにおいて、人は、外的な現實の危機的契機に異常に鋭敏な神經を理解しようとするが、意識はこのとき外に向つてはじけて行き、現實のカオスのうちに何ものかを指向するとともに、己れ自體のうちに、危機を作るのではあるまいか。そうでなしに、狀態の危急を高唱するに止まるならば、それは明快であるか

もしれないが、歴史を伝達するのみであって、歴史を作る態度ではない。歴史を作り、危機を作ろうとする者は、多く誤りを犯す。人をねじふせ、己れをねじふせるバネは、往々にして人をも己れをもしたたかに咬み傷つける。言いわけを許さない思想の捨身が、さまざまな烙印を負い、己れをずたずたにして、無情に横たわらなければならぬ。だが、危機を危機とし、ひとつの態度をとるとはこういうことでしかない。あとは、その思想が内閉卑小のものに止まるかぎり、それはそれまでで終りであり、もしたまたまその思想がたとえ茫漠たるものであれ、未熟不全のものであれ、巨大な錯誤のかたまりであれ、後代の他者がそこに何らかのものをつけ加えふくらまして行く可能性のものであり得ているなら、思想は生かして可なのである。

ところが多くの場合、生かしめるに値する思想に限って、頑固であり、苛酷であり、一見内閉的でさえあって、容易に他者の玩弄することを許さないのみならず、そこに近づくことさえ一種苦悶を伴う隔絶を帯びているから、はたしてそれをふくらまし得るのであるか、それともそこに近づくかぎり、その有する妖氣にまきこまれ、もろともに何らの可能性をも期待し得ることなしに終息せざるを得ないのであるか、ほとんど計測し難いのである。(思想上に一系のスクールをなし、公認のしるしを帯びた思想の系列にのみ近づく学者には、この困難は少なくみえるが、実はそのような公認の系列は、誤解の系列にしかすぎないことも往々にしてあり、思想は本来みな独往の思想なのであって、事はさほどに違わない筈である。)

北一輝に立ちかえるなら、もう十年も以前に、久野収が鶴見俊輔との共著『現代日本の思想』の中に北に関する辛辣な一文を草し、「問題としての北の発想を、これから北と全くちがった仕方で解かなければならない」とを主張し、竹内好もまたこれを受けて小文を成した(竹内好評論集、第三卷『日本とアジア』所収)。また橋川文三、吉本隆明の発言もその後現れた。

みずす書房刊『北一輝著作集』二巻が発行されて(以下、これを著作集と略称する)、わたしが読むことの

できずにいた北の主要労作の全貌が、世にあきらかとなった。わたし自身についていうなら、学生であった戦中、『支那革命外史』を異様な戦慄をもって翻読した思いや、戦後偶然見ることを得た西田税編『日本改造法案大綱』（たぶん大正十五年五月十日発行の版であったと思われる）の削除の〇〇〇に何のことやら判読もできず立ち迷ったグロテスクな印象を、いまさらのごとく反芻して、この全貌に真向わざるを得なかったのである。戦慄は別様の驚嘆に変じ、グロテスクな印象はさらに鋭角的な切りこみとなって迫った。しかし、わたしが北についてほとんど何も書くことができずにいるうちに、多くの北一輝論が世に現れて（一九六七年現在）、もうわたしが何かを加える必要がないかのごとくにさえ思われて来た。にもかかわらず、わたしには、やはり北について何かを書かないではいられないような衝動が失われていない。他の北の研究者にくらべて、わたしが何も多くの材料を持っているわけでもないのに、わたしはいったい何が書きたいというのであろうか。

わたしには、右翼体験というものがほとんどなかった。稚心そのままの少年ナシヨナリストであったのではないかと回想する何年間かの記憶はあるにしても、十代の末からはほぼ、戦中の市民社会青年（内田義彦の名づけ）に属していたように思う。わたしはもし、北のような思想者・革命者の生涯と業績とを、己が身の私史と相交わらしめて考えようとするならば、浮んでくる自虐・脱皮のモメントは、かつて自分もこのような人の影響のもとにあったのだということの検証にはなくて、むしろ、身をよじる苦悩・転向なしに戦中の市民社会青年たり得、そこからはまたほとんど直線的に戦後の共産主義青年たり得たし、戦後の共産主義青年というものはせいぜいそういうものでしかなかったという事実の揺曳の、どこにいったい大きな欠落が生じようとしているのかの検証におかれるであろう。わたしは、成りゆきに身をゆだねる限り、小批判者のすべてがたどったごとく、ミスティックなものに身をゆだねかねないであろう。むしろすべてが単なる成りゆきであったのではなく、決断はしばしば必要であった。それはどんなに曲折のない人生であったとて、要求されることである。わたしはわたしの責任において、それが易しかったにせよ、むづかしかったにせよ、わたしの歩みを選んだので、それはいまさら何

をいうまでもない。ただわたしには、もし明治ナシヨナリストの息吹きが、じかにわたしの周辺に吹きつけていたとしたならば、痛切な裏切りの意識なしに、容易に戦中の市民社会青年たり得はしなかったろうという仮定が可能である。すぐれたナシヨナリストが、すでに周辺にいなかったただけの話なのである。便乗ナシヨナリストに便乗するのは士たる者の恥辱に思えただけなのである。『支那革命外史』は、先にもいうように、強烈な印象をもってわたしをつつんだ。が、これだけではすでに市民社会青年になってしまっていたわたしを転向せしめなかった。わたしはむしろこの戦慄の中から、北の明治維新論やフランス革命論を深く記憶したのであって、同世代の或る一群の人たちを長くとらえてはなさないあの膨大な「中国」という主題は、他の種の人たちのフランスやアメリカ同様ついにわたしの心に落ちて来なかった。もしこの当時、『国体論及び純正社会主義』を併せ読む機会があったなら、事情は一変していたかもしれない。がいまは述懐の時ではない。要するにわたしは、北一輝を己れとのまったくの異質者として、向い合っているのである。しかもフランスやアメリカにとらえられたことのないわたしには、この異質者は他人ではない。

昭和のナシヨナリズムがわたしのような者をもついに包み切ることなく、明治のナシヨナリズムが北のようなラディカルな青年をまでついに包み切ったという事実は、わたしを今さらながら驚かせる。と同時に、わたしは北が後年きわめてミステイックなものに魅入られていった経緯を、この巨大な明治ナシヨナリズムそのものの中にだけ求めてはいけないのではないかと思う。

北の初心に、社会主義を直訳的に輸入したのでは所詮むなしいのであって、それを日本のナシヨナリズムにどう結びつけるかの発想が底在したとみなすものが、その結びつけに合理と非合理の結合を試み、ついに北はナシヨナリズムの非合理に混迷したととるなら、わたしはそれを疑う。ナシヨナリズムが即非合理のみであったのは昭和の特色であって、ナシヨナリズムはそこから救出されねば、真に止揚することはできない。

ふつうに考えられるのは、北が明治末期の社会主義者として立ち現れ、まず学者的生活（むしろアカデミーのそれではないにせよ）を確立しようとして『国体論及び純正社会主義』の大著を世に送ったが、国家権力をもつてする弾圧のためにこれが普及をばまれ、いわば日本の革命に絶望したあげく、新生中国の革命に望みを託して主として民族主義的な中国革命派宋教仁らと血盟し、しかしその故に孫文派を中心とする非民族主義的な中国革命の主流からは孤立せざるを得ず、同時に日本の帝国主義的中国侵略と中国革命の反日帝運動の衝突に板ばさみとなり、ついに進退きわまって最後には法華経の神がかり的な信仰に身をゆだねた結果、カリスマ的予言者の相を帯びた超国家主義の鼓吹者として果てたというコースである。これは大筋において否定できない北の経歴であり、最初の「純正」社会主義者、一転しての中国革命者、そしてさらに一転して昭和ファシズムのイデオログという三つの転身が北の一生を特長づけていることは事実である。しかも北は、『国体論及び純正社会主義』、『支那革命外史』、『国家改造案原理大綱』（後『日本改造法案大綱』）の三大著作を、この生涯の三つの転身に見合う指標のように残している。

理論家として出発した北が、終始大きな理論体系をもち、しかもその理論が現実に関与したという点は、とくに理論創造の能力に乏しかったが故に現実に関与しきれない理論をもってせず、ために便乗に終った日本ファシズムの指導者中匹敵する者がいないと竹内好らの指摘するところと評価されると思われる。日本人の精神を天皇教的な神秘主義に埋没せしめてしまおうとするファシストたちの中にあって、北は終始天皇機関説を執って動かず、けっして天皇教に転向はしなかった。が、しかも彼自身は法華経の信仰に身心をゆだね、カリスマ的予言者として終った。この、彼における合理と非合理の交錯はどう解かれたらよいのであろうか。何故に、天皇教を拒んだ北が、法華経に信条の根源を求めねばならなかったのか。破邪顕正のためには何ものをも精確に見きわめようとした北が、何故に何をも知ろうとしない境地に絶対を見出したのか。「南無」とは帰命であり、「知る」ことの対極である。